

## 佐賀藩蘭学再考 ―医学史の視点から―

青木歳幸

### 問題の所在

一九七〇年代から田崎哲郎氏や筆者らによって、「在村の蘭学」ないし「地域蘭学」が各地に存在し、幕末期には武士層の蘭学とあいまって在村蘭学が全体として拡大していたことが主張され、さらに筆者を代表とする国立歴史民俗博物館共同研究「地域蘭学の総合的研究」によって各地の蘭学が多様に展開し、近代を準備したことが明らかになった(1)。が、この共同研究では、佐賀藩蘭学については西南雄藩の蘭学特性があるかもしれないと言及するにとどめた。

西南雄藩および佐賀の蘭学については、杉本勲氏を代表とする「西南雄藩の洋学」が総合的な学術研究を行い『西南雄藩の洋学―佐賀・鹿児島・萩藩を中心に―』の成果がある(2)。また、藤野保氏を代表とする「佐賀藩の総合研究」もある(3)が、医学史的視点からの蘭学研究はない。佐賀の蘭学者・医学史については、鍵山栄氏の成果があり(4)、佐賀の医学史についての先駆的業績は酒井シヅ氏の好生館文書『医業免札姓名簿』の分析と目録化である(5)。

近年は、生馬寛信氏(6)や長野暹氏(7)らの研究のほか、文部科学省特定領域研究「我が国の科学技術資料の体系化に関する研究(略称江戸のモノづくり)―メンバーによる反射炉、洋書、医学書、写真等器物資料を学際的に調査研究する方法により、展示や研究にあらたな成果が次々と生まれてきている(8)。

が、佐賀の蘭学についての総合的学術的見解は、杉本勲「幕末洋学における西南雄藩の位置」(9)を超えるものは出ていなかった。杉

本氏は、同論文で佐賀藩蘭学の問題点と特徴をつぎの六点にまとめて提示された。

第一に、西南雄藩における蘭学の創始について、鹿児島藩では藩主島津重豪の一八世紀後半に、福岡藩では青木興勝を中心に一八世紀末から蘭学が創始され、「鹿児島・福岡両藩にくらべれば、佐賀藩の蘭学創始はややおくれている」、「佐賀藩の蘭学は蓮池支藩や武雄領から勃興し、天保年間には本藩をリードしながら藩内に定着したというケースが、他藩と違った第一の特徴である」と結論づけた。

「第二の問題点は西南雄藩の蘭学が医学から軍事科学へと重心を移してきたことである」とし、「藩主直正の初政に設けた医学寮が最初蘭学育成の拠点となり、伊東玄朴をはじめとする島本龍嘯の門下生らが佐賀蘭学の中核を形成し」、「佐賀藩の蘭学は他藩とくらべて医学から軍事科学への転換が、比較的早期にしかもきわだって行われたところに大きな特徴があると思われる」とした。

第三の問題点は、なぜ佐賀藩は反射炉による鋳砲に成功したのかということであり、最も有力なのは、「同藩では従来石見産出の砂鉄・和銑を材料として使用したのを改めて、蘭人のアドバイスなどにより外国製の高炉鉄に切りかえたこと、つまり輸入銑を利用したことが成功につながったとする説である」とした。

第四の問題点は、精煉方の果たした役割について、佐賀藩では「鹿児島藩より一年後(安政五年)に、火術方の軍事技術を支援し、かつ理化学工業の育成をはかる目的で、国産方内の一部局として精煉方を設置した」とし、精煉方メンバーの努力と力量が傾注され、蒸気船建

造（慶応元年）、アームストロング施条銃の製造に成功したと意義づけた。

第五の問題点は、海軍の建設をどう準備し、断念したかであり、佐賀藩は安政元年（一八五四）に直正が「蒸気船製造仰出され」、同年末に三重津造船所を設け、翌年長崎の海軍伝習には質量ともに諸藩随一の伝習生を派遣し、国産方に外国船購入の見返り物資として、陶器・白蠟・石炭などの佐賀藩特産品を扱う代品方を設けたが鉄製蒸気船の見積もりによって、造船技術の限界と財政負担の過重をさと、大船建造にもとづく艦隊建設の多年の夢を断念したと述べた。

第六の問題点は、「洋学が蘭学から英学へ、もしくは仏・独・露などのいわゆる洋学に転換していったことである」として、「佐賀藩においては蘭学より英学への転換はきわめてスムーズにかつ他藩に優先していた」と述べた。

本稿では、第一の佐賀藩における蘭学の創始と、第二の蘭学の軍事科学への転換についての二点を中心に再検討を加える。

以上の諸問題のほか、近年、鳥井裕美子氏が武雄の蘭学に関して、「しかし多種多様な品物を大量に購入した目的、購入資金、佐賀本藩との関係等々、不明な点はまだまだ多い」とし、「除き物―武雄の輸入品購入ルート」の解明の必要を述べた（10）。長崎貿易における除き物の意義については、中村質氏が、正規の輸入品が、諸役人の「除き物」、遊女らの「貰い物」として転売され、密貿易とならんで幕府の「鎖国的流通統制」を脅かすにいたった（11）と述べているほどに、佐賀蘭学研究に重要な研究課題であるが、本稿では立ち入らない。

## 一、佐賀藩蘭学の創始について

蘭学とはオランダ語を通じての西洋学術の研究と概ねの定義をしておく。杉田玄白らが翻訳した『解体新書』の刊行により、急速に興隆し、普及したことは周知の通りである。幕末に英学・仏学・独学等もはいる、洋学と呼ぶべき状況となるが、適宜使い分ける。一方で、長崎オランダ通詞らによる西洋医学研究は紅毛流とか楢林流、吉雄流などと呼ばれて独自の伝統を保持しており、杉田玄白らの起こした江戸蘭学に対し、これを長崎蘭学とよんでおく。

佐賀の蘭学は、島本良順（龍嘯）を始祖とし、文化年間以来、福地道林、大庭雪齋らにより広められ、執行勘造（伊東玄朴）、大石良英、山村良哲らにより進展したとする『鍋島直正公伝』の記述が通説であり（12）、鍵山栄氏も同様の見解である（13）。

「鎖国」政策により、寛永一八年（一六四一）年から福岡藩、ついで佐賀藩が長崎警備にあたり、以後、交互に長崎警備を担当した。そのため、佐賀藩の対外的関心は高く西洋文化との接触の機会も多かった。長崎通詞らとの交渉も当然かなりあったはずである。

佐賀藩と長崎通詞や医療の関係を、江戸蘭学が興隆しはじめた一八世紀後半から『佐賀県近世史料』を中心に拾い出してみる。

明和八年（一七七二）に、「（正月一七日）同日、御留守中、江戸御屋敷江御医師無之ニ付、池尻元宣倅元栄儀、為医学今大路道三老方へ隨身仕居候付、明年御参府迄、御屋敷被差置、医道稽古之儀御屋敷ヨリ昼間計罷越候通被仰付け（14）」とあり、当時は医者が不足していたこと、京都の名医今大路道三が修業先であったことなどがわかる。今大路家は曲直瀬氏で京都の典薬頭を勤め、漢方医の代表的名家であった（15）。

同明和八年に医業出精により、お目見え医師を仰せつかったのは、直次郎殿家来廣木順慶、対馬殿家来執行元由、兵庫家来山本寛安、阿波家来川崎田龍、町医沢野良伯ら五人であった(16)。かれらは漢方医のようであるが、すでに医業にすぐれた町医も生まれていた。

明和八年七月二〇日に、長崎通詞今村源右衛門から内密に入った情報によれば、阿波国ヒワサ浦に漂着した異国船からの差出状が届いたが、カピタンも読めず、ようやく紅毛国の「奥ドイチ国」の船とわかり、船は六月一二日に出港した。佐賀藩と今村源右衛門は内密の情報を伝えてくれるほどかなり密接な関係にあったことが知られる(17)。

また、同年に長崎阿蘭陀懸絵板二枚・唐大理石盆一つを長崎町役人後藤惣左衛門より高嶋八郎兵衛の心遣いにてご進物方が藩主へ差し上げている(18)。同年九月一二日には、美濃国出身今井田立松が、先年千百姫(蓮池・直寛室)の産後の腫気を全開させ、摂津守より出入り扶持を貰って今、長崎表に居住している同医師を佐賀藩主が長崎に行ったときはお目見えさせる手続きをとっている(19)。同年一〇月には、代々用いる御匙医がいなくなったので、組中医師へ医業奨励の申し渡しを出している(20)。

安永二年(一七七三)七月一五日に江戸を發った蓮池藩主鍋島摂津守が旅中で病氣になり、佐賀本藩医師から牧仲礼を派遣して治療にあたらせている(21)安永三年二月には出入り唐通事林市兵衛が長崎住居改築のため拝借金を願う一件があり(22)、同年七月廿二日には、出入りオランダ通詞植林栄左衛門が、フランス船の漂着内密情報を伝えてきた(23)。

長崎屋敷出入り通詞今村源右衛門が病死したときの、安永三年九月二七日記事は、長崎蘭学と佐賀藩とを結ぶ史料である。

安永三年九月廿七日、長崎御屋敷御出入今村源右衛門儀、致病死候付、被下置候拾五人扶持之内五人扶持、倅大十郎江被為拝領候、尤源右衛門儀先年ヨリ段々御用相立、大十郎儀ハ小通詞助ニも相勤候付、右之通拝領被仰付候、殘拾人扶持は、紅毛方大通詞植村(林)重右衛門・唐方大通詞林市兵衛義、兼而此御方御用筋別而立入相勤候付、兩人へ五人扶持充被為拝領之(24)

この記事から、佐賀藩は今村源右衛門を扶持米一五人扶持で出入り扶持人として召し抱えており、その死後は一五人扶持のうち、五人扶持を倅の大十郎へ、残りは紅毛方大通詞植林重右衛門と唐方大通詞林市兵衛に各五人扶持ずつ与えて出入り扶持人として召し抱えていることがわかる。この場合、紅毛というのは阿蘭陀と同義である。

天明三年(一七八三)正月廿八日には、昨年長崎へ入港したオランダ商館長「いさあかつゑんき(Isaac Titsingh)」が、ヨーロッパ、中国マカオなどの動向を記した書状をオランダ通詞が訳して佐賀藩へもたらしており(25)同年六月廿二日には、長崎より宿継ぎにて今度長崎に入港した唐船からの風説書を写した通詞から入手し(26)、同年八月四日には、出入りの通詞たちが訳したオランダ風説書を手に入れている(27)。情報をもたらす医者や商人にも扶持米を与えて出入り扶持人としている。

安永六年(一七七七)四月、長崎御番所で長崎お屋敷出入り医師上村春庵を五人扶持で召し抱えた(28)。唐津城下の日野屋常安久右衛門は一五人扶持を与えられ、寛政六年の江戸御屋敷類焼のときには、銅瓦を進上し、同七年正月一五日に進上品を持参して、藩主治茂にお目見えを許されている(29)。その子の久十郎も藩主に献金などして佐賀藩の扶持を貰っている。

安永三年に鍋島家出入扶持人となったオランダ通詞榎林重右衛門は、享保五年（一七二〇）の生まれで、明和五年（一七六八）に大通詞となり、安永六年（一七七七）に五八歳で病死した（30）。

榎林家の祖榎林鎮山は、慶安元年（一六四八）生まれで、オランダ通詞のかたわら、フランスの外科医パレのオランダ語訳版を『紅夷外科宗伝』（宝永三年）として訳し、元禄五年（一六九二）に通詞職を嫡男量右衛門に譲り、剃髪して名を栄休と改め榎林流外科を創始している。宝永八年（一七一）に没した。通詞職は二代量右衛門のあと三代長右衛門と続き、通詞職として四代目が重右衛門である。以下五代目重兵衛、六代目泰助、七代目長次郎、八代目量一郎、九代目種次郎、一代目定一郎と続く。五代目重兵衛は天明八年（一七八八）三月、五人扶持で出入り「阿蘭陀小通詞」として佐賀藩に召し出されている（31）。

外科医としての榎林家は、二男栄久が継ぎ、テーゲル膏という万能膏を発明した。そのあとを継いだ栄久四男栄哲豊矩は、宝暦八年（一七五八）に三五歳の短命で没したため、松浦家からの養子の栄哲高茂が医業を継いだ。元文二年（一七三七）生まれの栄哲高茂は、母が栄久二女であった関係で榎林家へ養子に入った。著書に紅毛流外科書『司命秘囊』がある。『榎林氏之伝』によれば「外科医門人八〇余人」もいた蘭方医で、佐賀藩から扶持を給された（32）。天明三年（一七八三）には、『紅夷外科宗伝』を写した『西洋医術図巻』を門人に与えている（33）。

栄哲高茂が佐賀藩に召し出された時期は諸説ある。『榎林氏之伝』には「天明七年九月、治茂公泰国院様御代御召出ノ御沙汰被為在候得共無拋事情有之、御辞退申上、然ルニ其後、寛政三年御家臣ノ御取扱

ニテ長崎御屋敷出入医ニ被召出五人扶持被為頂戴御番方治療係補助医被仰付候」とあり、天明七年（一七八七）に召し出されたが受けず、寛政三年（一七九一）年に家臣の取り扱いにて長崎屋敷出入医となり、五人扶持を給され御番方治療係となったという。

『佐賀県近世史料』の天明八年一二月二三日に次の記事がある（34）。

長崎御出入医師

五人御扶持被下

榎林栄哲

右者、数年御出入被 仰付置候処、御用相立、殊ニ先年以来（朱字）（業） 医師 師為稽古爰元ヨリ数人罷越、隨身等も仕候処、深切之心遣故、医業上達之者多、向以御用可相立者ニ付而、右之通聞番々々ヨリ申越候、付而者、如書載被 仰付而可有御座与請御意候処、此通被仰出之

史料によれば、栄哲高茂は、数年佐賀藩長崎屋敷に出入りしており、佐賀藩からも数人が学びにいったが、「深切」な心遣いで上達も早いので五人扶持を給するというものであった。

渡辺庫輔氏は、栄哲高茂の出仕時期を寛政元年（一七八九）とし（35）、『佐賀市史』は『榎林氏之伝』によったらしく寛政三年説をとっている（36）。しかし、『佐賀県近世史料』の寛政三年には、三月一〇日に長崎医師柳隆元が五人扶持で召し抱えられた記事はある（37）が、榎林栄哲の出仕記事は見えない。

以上から、榎林栄哲高茂は天明八年にいったん召し出されたが辞退し、寛政三年に五人扶持で召し抱えられたらしいとみておくが、後考の余地が多い。ただ、天明期に佐賀藩から榎林栄哲高茂へ数名が榎林流外科を学びに出かけていたこと、一八世紀後半に榎林栄哲高茂が佐賀藩医に取り立てられていたことは、佐賀藩蘭学の創始時期に関する

重要な事実である。寛政八年（一七九六）には、佐賀藩長崎出入医師として榊林氏の名がみえる（38）。

寛政九年に栄哲高茂が没し、養子の栄哲高連が医業を継いだ。栄哲高連の実父は町医福地昌運、実母はオランダ通詞榊林重右衛門次女ミツである。栄哲高連は宝暦九年（一七五九）生まれで、『榊林氏之伝』によれば「諸国ヨリ来テ門ニ入ル者百二十拾八人」という著名な医師であつた。養父について佐賀藩長崎屋敷に出入りし、扶持をもらつていたらしい。享和元年（一八〇一）には、佐賀藩より御切米三〇石を拝領し、正式な藩医となつた。長文だが、重要なので引用する。

一（享和元年）三月十三日、長崎医師榊林栄哲義、兼而御屋敷且御番所御出入被仰付、彼地御越座之節、御目見をも被仰付、御扶持方をも被下置、病用出精仕、一躰内外之療治仕候処、当時は専内治之筋重ニ相行、格別御用相立候、然処、栄哲ヨリ内々奉願候は、右家之儀、佐野孺仙先祖以来代々栄哲門弟二而、何も医術皆伝仕、其外御国許ヨリ外科為稽古罷越候者共多人数之儀二而、其内免許之者も数人有之、右様之処を以、亡父栄哲以来此御方奉慕厚、御館入仕病用出精仕候、右之通之由緒も有之候ニ付而ハ、何卒於相成義は被召抱被下度旨、亡父己来志願之趣重疊相歎候段、村山寛三郎聞番かヨリ申越候、右は前断之通、孺仙先祖師家ニ而代々相伝をも仕、其外御国許ヨリ外科数人、栄哲所罷出修行仕、多人数之門弟深切ニ取立、是迄数代御用相立、殊ニ内外之療養相行候付而ハ、御屋敷・御番所共病用能相弁罷在、惣而御番所之義、筑前ヨリハ内外之医師被差越置義ニ候処、此御方之儀其儀無御座、自然不意之病人有之、外辺等仕候而不叶筋も出来候節は、必止と差支申儀ニ御座候、旁之旨を以ハ被召抱、左ニ書載之通被為拝領

方ニ而は有御座間敷哉、尤其通於被仰付は長崎被差置、向々子孫共迄彼地在住被仰付置候ハ、危急之病用等迄弁利可有御座哉と吟味仕候段、請御意候処、伺之通被仰出之

三（マ）高百石

長崎医師

御切米三拾石被下之 榊林栄哲（39）

栄哲高連は兼ねてから長崎屋敷に出入りし、長崎では藩主にお目見えも許され、扶持も貰つて病用に出精していたこと、内科・外科を治療していたこと、それまでは佐賀藩では内科を重用していたこと、佐野孺仙の家は先祖代々榊林家門弟で医術皆伝であつたこと、佐賀藩より外科修業のため多人数が榊林家へ修業に来て、免許を与えた者も数人いること、そのような理由で亡父栄哲（高茂）以来御館に出入りを許されて病用に出生してきたこと、右の通りの由緒があるので召し抱えていただきたいこと、これは亡父以来の志願であることを村山寛三郎を通じて藩へ願ひ出たこと、藩のほうとしても榊林家は確かに佐野孺仙先祖の師家であること、国元（佐賀城下）から外科数人が栄哲のもとで修業したこと、多人数の門弟を取り立てたこと、これまで数代御用を勤めたこと、内科外科の療養ができればお屋敷も御番所も病用に役立つこと、とくに御番所へは筑前から内科・外科の医師をよこしていたが、これでその必要はなくなること、不意の病人も出るので長崎在住の医師が都合のよいことなどの理由で召し抱えること、切米三〇石とすること、長崎在住のまま危急の病用に備えることなどが記載されている。

榊林家は、栄哲高連の父（栄哲高茂）の代から佐賀藩長崎屋敷出入り医師であつたことがわかる。出入扶持人であつた榊林栄哲高連が、享和元年には切米三〇石で、正式に長崎在住藩医として佐賀藩に召し

抱えられた。このことは、『榊林氏之伝』にも「享和元年酉三月治茂公泰国院様御代、永代長崎住居ニシテ御切米三拾石ヲ賜り、御召出相成、御側御医師ニ被召成、鍋島孫六郎組ニ被仰付候」(40)とあり、裏付けられる。

従って、寛政年間には佐賀藩の出入り扶持人となっていた榊林家は、享和元年に榊林栄哲高連が長崎在住のまま藩医として切米三〇石で召し抱えられたことは確実にいえる。

さらに重要なことは、少なくとも寛政期以前に藩医佐野孺仙やほかにも数人が榊林流外科の修業をしていることが、前述の天明八年の記事以外にも裏付けられたことであり、彼らの何人かは藩医であることが推測できる。また、榊林家は「数代御用相立」とあるので、出入扶持人としての召し出しは、初代榊林鎮山が活動した一八世紀前後にさかのぼる可能性さえある。

文化元年(一八〇四)に藩主治茂に、春から舌に疽(悪性腫瘍)ができ、九月には、疽が蔓延し糜爛し腐肉状に悪化したことを記した容体書に、診察した「迎亨純、花房三立、西岡長垣、相良柳庵、佐野孺仙」と五人の藩医の名があり(41)、前述の史料によれば、先祖代々榊林流外科を学んだ蘭方医である佐野孺仙が御側医として藩主の容態を診ている。また、他の藩医にも榊林門人を推測できる。

享和元年に召し抱えられた榊林栄哲高連は、文化年中に佐賀藩主鍋島斉直により御切米四〇石に加増された(42)。栄哲高連の長男栄建と三男宗建がそれぞれ外科医を継いだ。栄建は天保十二年(一八四一)に京都に上って開業し、のち京都の蘭方医とともに種痘の普及に努めた。宗建は、文政一〇年(一八二七)に父栄哲高連のあと長崎在住佐賀藩医となった。そして、嘉永二年(一八四九)にモーニッケがもた

らした牛痘癰を宗建子建三郎らに接種し、その痘苗が全国に普及したのであった。

一八世紀後半に、佐賀藩領に紅毛流外科が伝播していた事例をもう一つあげよう。天明三年(一七八三)に、川久保村(現佐賀市久保泉町)神代家侍医横尾元丈惇横尾文助は、佐賀藩に次のような書状を差し出した。安永六年(一七七六)から七年季で京都遊学をしており、年季明けになったが一条家で文助を召し抱えたいというのでお暇を願いたいというものであった。ところが、佐賀藩では国法に触れることなので大問題になり、戻ろうとしない文助は、佐賀藩と一条家のやりとりののち、藩に捕らえられた。吟味後、文助は、天明四年一〇月二日に芦刈永明寺において、切腹させられた(43)。

副島廣之氏によれば(44)、横尾文助は、享保十九年(一七三四)一〇月一〇日に、鍋島家臣神代家の侍医横尾元丈の二男として生まれた。初めは紫陽、のち紫洋と号し、黄道符、黄世廉、黄質世、また孟瑞、孟徴などとも号した。紫洋は、八歳で尼寺の春日山高城寺に寺入りし漢学修業後、宝暦三年(一七五三)に萩の古方派医師滝鶴台入門、帰郷後、宝暦十一年(一七五九)から郷里の神代家学校「竹裡館」の教主として、子弟指導にあたった。尊王思想をもち明和事件にも関与したという。安永六年(一七七七)に佐賀藩から京都遊学を許され(45)、遊学中に朝廷や一条家にも仕える身となった。七年季が過ぎても京都での滞在を願っていたが、国法にそむくとして捕らえられ、切腹となったのだった。

この文助が、京都遊学中に友人矢部直へ、父元丈の記した『紅毛秘方』を紹介している。『紅毛秘方』末尾に「右紅毛秘方備之横尾先生。先生鍋島之人也。字文助、其父嘗テ受外科ノ術ヲ紅毛ノ人、後文助遊

京師、友人矢部直請而謹写之有我友加藤仲学言者術矢部為受先生、予又従加藤与之言 寛政元年」とある。横尾文助の父（元丈）が紅毛外科を学んで記した『紅毛秘方』を、横尾文助が所持し、文助が京都遊学中に、文助友人矢部直、加藤仲学、当時の所蔵者へと写されたことがわかる（46）。

横尾元丈は、通称耕一郎、宝永七年（一七一〇）生まれで安永五年（一七七六）に没した。鍋島家臣川久保邑主神代家侍医として仕え、禄高二五石で春日村尼寺に住居した。『紅毛秘方』の薬方の一例をあげると、「○カンフラン□□ 一本洗条ノトキハ少シ温ム 焼酒九十六銭 樟脳十二銭 右七日干ス」、「○テリヤアカ焼酒ニテネルヲ云テン キテエルテリアアカ 主治毒虫、蛇□タルニホツシ（木綿）ニ浸シ疵ノ上ニオキ火鉄ヲ用」、「○スヒイルテスマテリカアリス 乳香十六匁 没薬同、琥珀同 焼酒百九十二匁 金瘡腐メ止生肉ヲ育シ婦人子宮ヲ健ニシ、経水ヲ調脾胃ヲ調フ ○ノミクスリ也」などとある。この薬方は吉雄耕牛系統といわれ、横尾元丈が吉雄家に修学した時期は宝暦一〇年（一七六〇）以降と推測されている（47）。一八世紀中頃に、長崎でオランダ医学を学び、『紅毛秘方』を記した横尾元丈は、佐賀藩領内に在住した、史料的に確認できる最初期の紅毛流外科医とすることができる。

前述の榊林流外科医佐野孺仙とも、洋画家司馬江漢（延享四々文政元）とも深い関わりのある佐賀藩士に山領主馬がいる。司馬江漢は、平賀源内らの指導をうけ、天明年間（一七八一〜八九）に銅版画の制作に成功し、天明八年から翌寛政元年（一七八九）にかけて長崎へ旅行し、西洋天文学・地理学などの理解を深めた。晩年は隠遁生活で、文政元年（一八一八）、江戸で没した。

司馬江漢書簡は中野好夫氏により計二五通確認されている（48）。そのうちもつとも数多く発見されているのが、佐賀藩士山領主馬利昌宛で九通にも及び、司馬江漢と最も親しい人物であった。

山領主馬については、大園隆二郎氏の詳細な研究があり、本稿も多くをこれに依っている（49）。主馬は宝暦六年（一七五六）、佐賀藩医佐野常置仲庵の三男に生まれた。山領千左衛門言利の養子に入り、同家を継ぎ、江戸詰ののち、有田皿山代官を勤め、文政六年（一八二三）に没した。主馬は通称で、号梅山、蛟江亭、字は師言という。梅山山領先生碑が精町水月禅寺にある。安永年間から、佐賀藩主治茂、斉直に重用され、天明五年（一七八五）から文化九年（一八一二）まで十数回参勤をつとめ、享和二年（一八〇二）から文化九年まで江戸屋敷詰をし、その間に司馬江漢との交流を深めたものと考えられる。主馬は多久家家臣漢学者石井鶴山の弟子で、徂徠学派の文辞的系譜をひいており（50）、寛政一一年（一七九九）に江戸詰を終えた主馬は、佐賀への帰国途次に、伊勢・吉野・奈良を巡って紀行文『大和路日記』を記している。これは、見聞記録のほかに二三首の和歌をおさめ、和歌和文の板本としては、佐賀藩での嚆矢をなす（51）。

「藤原佐野氏」系譜（大園隆二郎氏作成）によれば、佐野家は常真（寿仙、天和二年卒）のとき鍋島二代藩主光茂に五〇石で召し抱えられ、以後、常盛仲庵（元禄元年没）、常道寿仙（没年不詳）、常信仲安（享保一〇年没）、常置仲庵（主馬実父、寛政五年没）と続く。常置仲庵は安永九年（一七八〇）に「御側外科佐野仲庵」とあり（52）、外科医であった。なお、同時期の佐賀藩外科医に相良柳庵もいた（53）。常置長男が、前述の榊林流外科医佐野常昭孺仙（文政八年没）であり、主馬はその弟であった。また常昭孺仙のあと常徴孺仙、その養子が蘭

学者で精鍊方主任となった佐野常民栄寿（明治三五年没）であり、山領主馬は佐野常民の大叔父にあたる。数代前から榊林家に学んだという系譜のある佐野医家出身の主馬は紅毛流外科も幼時期から見聞していたと思われる、蘭学への接近もゆえなしとしない。

さらに、主馬は江漢に佐賀藩士の蘭学修業を斡旋していた。文化初年と推察される江漢から主馬宛書簡に、主馬が佐賀の産物干し柿等を送った礼状のなかに「村山氏十三日ニ御在所へ御立之趣」とある（54）。この村山氏は佐賀藩士村山藤九郎で、主馬の斡旋で司馬江漢に弟子入りしていたとみられる。佐賀藩士堤主礼範房が文化九年（一八一二）に編んだ藩士人物誌『雨中の伽』によれば、「蛭学（蘭学とも云）一、近年江戸にて蛭学流行し、中ニも司馬<sup>（五）</sup>漢（芝二住）、是に村山藤九郎弟子付、斉直公命ニ依て学。又城州島本良順、是は於長崎学、又同御代ニ依て司馬広漢が画する所の油絵の蛭画を村島雪川・副島半十郎・増田宗閑など学ぶ」とあり（55）、近年江戸にて蛭学（江戸蘭学）が流行していること、蛭学を村山藤九郎が司馬江漢に学んでいること、島本良順は長崎で学んだこと、江漢に油絵を村島雪川、副島半十郎、増田宗閑らが藩公の命で学んだこと、などが記されている。村山藤九郎は藩主斉直の側で仕え、文化八年（一八一）に司馬江漢に入門した（56）。天保五年（一八三四）秋まで三の丸御懸硯方元締・御賄方・御納戸方を兼務している。副島半十郎は文化七年に村嶋雪川とともに、江漢への謝礼金など三両づつ援助してもらっている（57）。村嶋雪川は御絵師で文化二年（一八〇五）の切米二〇石をもらっており、文化四年に御茶道頭も兼務した。増田宗閑は、文化三年に御茶道見習となり、司馬江漢入門後は画業をよくし、泰国（第八代藩主治茂）らの真影も宗閑の筆という（58）。この洋画学習の系譜は、佐賀藩士古

川松根から明治初期の旧佐賀藩出身洋画家百武兼行へと伝わっていたと考えられている（59）。

以上、佐賀藩蘭学創始について検討をすすめてきたが、安永三年にオランダ通詞榊林重右衛門を、享和元年に紅毛流外科医榊林栄哲高連を召し抱えたこと、一八世紀後半にはオランダ通詞や唐通事からの海外情報を入手していたことや榊林流外科や吉雄流外科などオランダ通詞による長崎蘭学の影響が深くあったこと、神代家侍医横尾元丈が、現研究段階では佐賀藩領で初期の蘭方医であることなどが判明した。また、佐賀藩領での蘭学受容は、司馬江漢と山領主馬、榊林家と佐野孺仙などの系統も複線的に関連づけて捉えなおすべきで、島本龍嘯を始祖として単線的発展として捉えていた『鍋島直正公伝』等に見られる蘭学の創始についての通説は修正されるべきである。

### 三、佐賀藩蘭学の軍事科学への転換について

杉本勲氏は、弘化元年（一八四四）に火術方を創設し、嘉永三年（一八五〇）大銃製造方を新設し、反射炉の建造に着手したこと、安政元年（一八五四）、医学寮内の蘭学寮を火術方に移管し、軍事関係蘭書の翻訳と西洋式砲術の研究・教育にあたらせたこと、嘉永五年に精鍊方の設置により理化学工業の研究、安政以降も海軍取調方、三重津造船所などを設けて軍事力の増強につとめたことなどから、佐賀藩は「他藩とくらべて比較的早期に医学から軍事科学への転換が比較的早期にしかもきわだって行われた（60）」とした。

それでは、医学から軍事科学に転換したといわれる弘化元年以降の佐賀藩の医学がどのように展開していたのか検討する。



天保五年（一八三四）七月一六日に八幡小路に医学寮が設置された（61）。これは藩儒古賀穀堂が、文化三年（一八〇六）に『学政管見』のなかで、蘭学修業の必要性のほかに、医学寮での医学稽古の必要性、医学寮では外科、小児科、口中科、眼科、鍼治、按摩、本草科等種々の科のこらず稽古ありたきことなどを述べて二八年後のことであつた。

医学寮は同年一〇月二一日に開講し、「内科に西岡長垣、牧春堂、古賀安道、福地道林等、外科には町医納富春入あり。就中納富は名声高く切腹をし損じたる者の腸を包み、陰囊の瘤を切斷し、婦人の陰門より情夫の挿入せる木片を抜き取りたるなどのことありて、のちに古賀穀堂の痔花を載りたるも此人なり（62）」という陣容で発足した。多久領へも同年一月一五日に、町医・郷医一統出席し稽古するよう達しがあつたため、出席すべき町医・郷医名を届け出ている（63）。が、全領からも医学寮への医学稽古出席は少なく、いったん衰微したとみられている。

天保一四年（一八四三）伊東玄朴が七人扶持で召し抱えられ（64）、弘化元年（一八四四）には大石良英が五人扶持で召し出された（65）。つづいて弘化四年（一八四七）に大庭雪斎が御側医に召し出された（66）。大庭雪斎は、大坂の蘭方医中天游に緒方洪庵とともに学び、さらに緒方洪庵塾で蘭語を学習し帰郷した。このころから西洋医学導入の動きが積極的になってくる。伊東玄朴らが牛痘の輸入を藩主に説き、榎林宗建を通じて商館長に依頼していたところ、嘉永二年（一八四九）のモーニッケ苗が活着した。

一、八月六日、御側ヨリ外向へ左之通

此節蘭人牛痘之種持渡、長崎ニおみて引痘相成候趣相聞候ニ付、

右種御取寄相成、御領内相広り候様、御内々思召を以大石良英出崎被仰出候末、彼地住居榎林宗建子へ引痘相整、御城下差越相成候ニ付、左ニ書載之人々へ引痘方被仰付、右牛痘ニ而引痘相成候得は、別而輕安之儀候而別条無之もの之由ニ候処、自然妄之種方等相整如何之儀も致出来、人々疑惑を懷候儀等有之候而は御主意不相叶候条、引痘方扱又右懸り合被仰付候人々之外、妄之取計無之様、吃度筋々相違相成候様之事

但、右牛痘種之儀、最前御内々榎林宗建手筋を以蘭人へ御証文之末持渡候、其末追々淳一郎様其外様御引痘被成候様被仰出（67）長崎在住佐賀藩医榎林宗建の子に植え付けられた痘苗が、長崎へ向かつた藩医大石良英によつて佐賀城下へもたらされ、藩主子息淳一郎（のち直大）へも植え付けられ、さらにこの痘苗が全国へ数年のうちに普及していった。また「妄り」の植え方を防ぐために、引痘方が設置され、御側医が任命された。このとき、引痘方に水町昌庵、馬渡耕雲、牧春堂、大石良英の四名と諸係に永松玄洋、山村良哲、外尾文庵（68）が任命され、市中郷中所々に出張所をたてて医師を巡回させて種痘を実施することとなった（69）。多久領では嘉永二年八月一六日に多久一代領主多久茂（しげと）族の弟萬太郎に種痘を実施している（70）。種痘の成功は西洋医学修業の機運を高めた。緒方洪庵の適塾修業者をみると、門人姓名録から三五人が知られるが、その入門年は、迎文益（記載なし）、伊東玄敬（弘化三年入門）、渋谷良耳（入門年記載なし）、志田春庵（入門年記載なし）のあと嘉永元年に坂本徳之助、佐野栄寿の二名、同二年四名、同五年一名、同六年三名、安政二年一名、同三年二名、同四年一名、同五年三名、同六年六名、万延元年三名、同二年二名、不明一名の三五人で、嘉永二年以降急増している。

嘉永二年の四名は、弘化四年に御側医になった緒方洪庵と同門でもある大庭雪斎の勧めと種痘の成功が影響したのだろう。安政六年の六名は、前年のコレラ流行への対策と、後述する好生館による西洋医学奨励策、蘭学学習の積極的奨励策によるところが大きい。

嘉永四年（一八五一）二月一七日に、佐賀藩は、今後は家業未熟の医師は組外れにし、熟達すれば組付医師とする命令をだした（71）。組外れにされた医師は再建された医学寮で試業を受けることになり、同年に医学寮に蘭学寮が併設された。

こうして佐賀藩領内の医師は、医学寮での試験や修業が義務づけられ、合格すれば開業免許証である免札が与えられた。ただし、この時期の試験や修業の内容は、初期免札者の顔ぶれから判断すると蘭学も含む医学全般であったと推察される。その実施記録が『医業免札姓名簿』（72）で、嘉永四年一月一日から安政五年（一八五八）九月二一日までの七年間に六四二名の免札医師名が記載されている。この数は当時の佐賀藩領で開業しているほぼ全医師数といえるだろう。嘉永四年は御側医内科・口科水町昌庵、内科牧春堂、外科佐野孺仙、針科野口文郁など二六名、嘉永五年には外科林梅馥、内科大石良英など二五名が免札をうけたが、初期に名がみえるのは教師層であったから、免札を無試験で与えていたとみられる。嘉永五年から師匠名を記した医師名がみられる。門人の多い順に牧春台二一名、大石良英二〇名、野口槐庵一四名、島本龍嘯一四名、西岡春益一三名、清水原沢一二名で、大庭雪斎門人は六名だった。免札者六四二名のうち、町医・郷医が一〇五名で、彼らもまた医学寮で西洋医学を修業して村や町で開業し、西洋医学を浸透させていくことになる。

嘉永六年（一八五三）に蘭学寮頭取に大石良英とともに大庭雪斎が

任命された（73）。安政元年（一八五四）には蘭学寮を医学寮から火術方にうつし、蘭学寮教導に大石良英と大庭雪斎、指南役に永田玄洋、宮田魯斎（伊東玄朴・緒方洪庵・松本良順門人）、坂本徳之助（緒方洪庵門人）、深川玄哲を任命した。

安政二年六月二〇日には、「一、同廿日、御側御医師漢方相用候者、以来和蘭医術相兼候様被仰出」という達しを出し、御側医で漢方医学を用いている者は以後、西洋医学を兼ねることとし（74）、安政三年九月十一日には、御側医以外にも西洋医学修業を命じている。西洋医学導入の動きが急速に高まった。

安政五年（一八五八）九月に医学寮を独立させ、好生館として片田江に移転することになった。

一、同十四日、請役所ヨリ左之通相伺候処、其通被仰付、医師之儀大切之業柄ニ付、先年学寮被御取立、夫々御仕組相成、学館ヨリ心遣候様被仰付置候得共、当節別段役局被相建、医生之儀一般、猶又打部稽古仕候様被仰付方有御座間敷哉、於然ハ先以左之通被仰付方有御座間敷哉、奉伺候

請役相談役

医学寮心得

中野兵右衛門

但、教導方大庭雪斎・大石良英被仰付其外略之、扱又先年医学寮被相建候節、好生館之額御染筆被下置候末ニ付、当節其通相唱候様被相建、且学寮之儀片田江へ被相建（75）

教官は教頭大庭雪斎、大石良英、教導島田南嶺、永松玄洋、宮田魯斎、相良弘庵、教職山村良哲、榑林蒼寿、城島淡海、林梅馥、助手牧春堂であり、ほとんどが蘭方医か漢蘭折衷医となっている（76）。

好生館建設後、佐賀藩領での西洋医学研修の機運は急速に領内へ広

がり、まず、領内開業医の掌握と組織化がはかられた。安政七年（一八六〇〔文久元年〕）三月九日には好生館から開業免札のないまま配剤してはいけないという達しを出し、多久役所へは三月一三日に届いた。

#### 写

一、医師之義人命ニ預り大切至極之業ニ付、猥ニ配剤不致様医師一統御試之上、開業免札被相渡置候処、間ニは無其義執匙配剤いたし候向も有之哉ニ相聞、不可然義ニ候条急速差留相成候而、其段好生館達出相成候様被仰付義ニ候条、此段筋々可被相達候 以上

申三月九日（77）

この達には、医師は人命を預かる大切な仕事だから妄りに配剤などをしてはいけないこととある。さらに、同年閏三月二日には、請役所から多久役所へ、以前発行した開業免札を好生館へ返上させ、医師へ西洋医学の再教育を行う旨の達しが出された。ただし、達しの最初の事項は普請方関連である。その達しには

郷普方役々納所江筋為普請出張方、扱又好生館ヨリ医師中免札方左之通申来候事

一筆致啓達候、普請請方呼出有之後藤俊次郎被差出候処、当月末ニ懸納所江筋為普請出張相成筈ニ付、其手配被相付置候様、惣而当節ハ小城之方入込相成候付、止宿等之手当ニは不相及旨被相達候、且又好生館呼出にて最前医師中へ、開業免札被相渡置候得共、来ル廿日までニ銘々右免札被指出被相納候様、委細別紙写を以被相達候条、旁御当役方被相達、夫々御栄出可被成候、此段為可申越如斯御座候 恐惶謹言

閏三月二日

木下忠左衛門

米倉 簡之助殿 梶原 喜兵衛

追而、免札納方之義在佐賀之医師中へハ相触置申候 已上

#### 写

医師之義厚以思召一統西洋法研究いたし候様被仰付置候、付而免札被相改候半而不相叶義ニ候条、左ニ書載之人々は迄被相渡置候免札之義、来ル廿日迄之内銘々持出一先好生館相納候様、尤配剤御差留ニ相成候通ニ而諸人難渋可有之候条、配剤丈ハ当分被指免置候条、此段筋々可被相達旨ニ候 已上

岡橋文賢 同賢道 鈴山俊庵 山口元逸 鶴藏六 尾形良益  
松崎雲江 三根道圓 西春濤 松尾俊益 池田文庵 尾形春園  
於保玄庵 於保高益 吉田文仙 前山杏春 前山雲洞 岩永仲健  
前山良意

好生館

閏三月二日

右之趣承知仕候 已上（78）

とあり、多久領内の一九名の医師へ西洋法研究をするように命じたこと、銘々が開業免札を三月二十日まで好生館へおさめること、配剤だけは禁止すると諸人が難渋するから当分さし許すことなどを達した。

この達をうけて、名指しされた一人である尾形春園は、二三歳になる倅の蛟南を好生館に三年修業させることにし、多久役所へ願ひ出た。

#### 口上覚

私世倅蛟南儀当申二拾三歳罷成候を、只今より向三ヶ年好生館寄宿為仕度奉願候条、支所無御座候半ハ願之通被指免被下候様、筋々御相達可被下儀頼入存候 以上

申四月

尾形 春園

田上 新右衛門殿

石井 又兵衛殿 (79)

佐賀藩領での西洋医学への転換奨励により、好生館だけでなく領外へ修学に出る者も増加した。多久の前山雲洞は、安政六年春から七年まで、医道稽古のため長崎遊学を許されて松本良順のもとで修業していた。

奉畏口上書

私義医道為稽古長崎表遊学被仰付候ニ付、去春ヨリ彼地罷越公儀御医師松本良順老江隨身仕り、御陰ニ研窮仕居重畳難有仕合奉存候、然処当度始親杏春病氣之段申越候ニ付、先生江も其段申断罷帰候処、大病ニ付色々療養手を尽候得共唯様差募り其驗無御座相果申候、惣而ハ当年までハ被仰付置候遊学年限中ニ付、又モ彼地罷越筈ニ御座候処、最早彼地罷越ニ不相及段御賢慮被仰出候、就而ハ前断之通長崎表不叶罷帰候末ニ付、暫時彼地罷越去年来滞崎之末、彼是引払之手筈相附候半而不相叶、殊ニ公儀御医師隨身罷在、就中上様ヨリも色々御尋之次第をも御座候ニ付、無抛御名内相部罷在候ニ付而ハ、余之塾生と相替不見苦分ニハ始末取繕候而ハ、場所柄御外寄をも相恐蒙ニて、蘭人并ニ先生御目附、将又通詞兩人其外塾中、是まで世話相成居候向々へ夫々挨拶等仕儀半可不相叶、且又、眼療道具一通相整度奉存候、就而ハ去秋金拾五両大拝借仕り、且又当壺ケ年之御合力をも頂戴仕り当度始ヨリ罷帰候得ば、何程かハ返上仕候半而不相叶候得共、右之振合共ニ而、何分其義不相叶拝領被仰付度奉願候、此所又々拝借奉願候亘り甚以恐至極奉存候得とも彼は取束候而ハ、大総之金高二相上り地行

不束之身分、殊ニ亡父大病之末死後葬式彼は過分の入費相立、誠ニ以当惑千万之参り掛リニ御座候、併家内之義ハ差置先以長崎表引払之義、最早難差延ニ付太閤相目論見候処、金貳拾両丈ハ是非無御座候而ハ、夫々仕舞出来不申、過分之金高誠二十方暮候、参り懸リニ御座候、依之毎々難奉願御座候得共何れ之筋ヨリ歟、金貳拾両丈拝借被仰付被下候ハ有御座間敷哉奉願候、於此ハ御蔭を以彼地罷越引払之始末夫々可相調と奉存候、尤返上之義ハ被仰付次第奉畏義ニ御座候、於然ハ御蔭ニ可也ニ彼地引払可相調、御重恩尚又難有仕合奉存候条、彼是之次第幾重ニも御仁恕之御評議を以、願之通被仰付被下候様、筋々宜舗被仰啓被下度深重御頼仕候以上

申七月

前山雲洞

梶原喜兵衛殿 (80)

前山雲洞が松本良順のもとで修業していたところ、父杏春の死去にあい、やむなく長崎遊学を中止せざるをえなくなったが、その関連の費用を援助してほしいという願書である。松本良順の門人名簿『登籍人名小記』には、佐賀出身門人が前山雲洞、渋谷良耳、宮田魯斎、井上仲民、島田東洋の五名記載されており、この修業が裏付けられる(81)。

安政六年ごろから、他領蘭学塾、たとえば緒方洪庵塾などへの修業が急増するのは、安政五年のコレラ大流行対策と好生館および藩が全領医師へ西洋医学研修を義務づけたことが大きな要因であった。

それでも、領内では好生館への修学を拒み、配剤を続けていた開業医もかなりいたとみられる。そこで、文久元年(一八六一)七月には、好生館から佐賀藩領内医師に対し、医師一統西洋法を学ぶようにする

こと、その再教育のために開業免札を与えられたものも好生館の講義をうけること、文久三年（一八六三）までに西洋医学へ改めない者は配剤を禁止することになるという厳しい達しが出された（82）。

さらに翌八月の本藩請役所からも、藩として西洋医学が精密であるから西洋医学研修を命じたにもかかわらず、旧来の宿習にとらわれて趣意が通らないのは決してよくないので、以後は漢方医学を一切禁止して西洋医学に改めることを命ずること、一定期限の後西洋医学に改めない者には営業を禁止することという厳しい通達を出した。その年限は、急に禁止すると難渋するものもいるので、佐賀城下およびその近在二里四方のものは亥年（文久三年〳一八六一）まで、遠在端々のものは丑年（慶応元年〳一八六五）までに西洋医学に改めることとした（83）。こうして、佐賀藩領の開業医師は慶応元年までにはすべて西洋医学を学ぶことになり、修業の程度差があっても実施されたと思われる（84）。

好生館では、藩権力からの強制的西洋医学研修を進めると同時に、領内種痘の引痘方手伝いを通して、郷医（在村医）への西洋医学の知識・技術普及もすすめていた。

佐賀藩が嘉永二年に牛痘種痘に成功し、その痘苗が全国へ広まり、どう伝播したか、各地での種痘が実施されたかについては多くの研究がある（85）。しかし、佐賀藩領内でどのように種痘が実施されたか、領内の医師たちとどう協力して実施したかの研究はほとんどみられなかった。本稿では、多久領と山代郷立岩村での事例から佐賀藩領における種痘実施の一端をみることにする。

嘉永二年（一八四九）の牛痘種法成功により、引痘方に藩御側医が任命され、佐賀本藩領を中心に種痘を実施していた。嘉永四年になる

と、

一、（一二月）同二八日御留守御年寄ヨリ、引痘方之儀、是迄於御側被相整候得共、御領中一般相懸儀に付、外向被差出方有御座達上聞候、但右牛痘種之儀、一昨年酉年初而御取寄、淳一郎様其外御引痘有之、其末於御側御引痘方被相整候処、猶又手広く行き渡り候様御吟味之末本文之通（86）

とあり、領内への実施準備も整ったので種痘をさらに広く整えることとなった。くだって、安政七年（一八六〇〳万延元年）三月一〇日の多久『御屋形日記』をみると、

御私領引痘方御願出之末被指免旨左之通申来候付、当役方相達夫々手配相成候様取計致候事

一筆致啓達候、最前御願出ニ相成居候御私領引痘方之義被指免旨ニ付、来ル十二日大町之方ヨリ種取ニ相成候様被相達候次第、後日本下忠左衛門ヨリ被申越至候由、定而御承知可被成、弥十二日二種取被仰付候義相違無之哉、尚又今日其筋聞繕候処其通被仰付旨ニ而、惣而は同日朝五ッ半比まで之内、凡拾人計り、同所町裏寺有之候処ニて植方被相整候条、同所ニて懸合之医師釣合植方相成候様旁被相達候、御当役方被相達其御手配可被成候此段為可申越如是御座候 恐惶謹言

三月十日

梶原喜兵衛

米倉 簡之助様

一、前断ニ付場所其外左之通

引痘植場所

多久町別当宅

手伝医師者

山口元逸

尾形良益

鶴藏六

岡橋賢道(87)

とあり、私領引痘方の義が許可され多久領での種痘が許可されたこと、三月一二日に大町から種取りすること、ついては手伝い医師の植え方を整えることなどを達した。手伝い医師に命ぜられた岡橋賢道・山口元逸・鶴藏六は伊東玄朴門人、尾形良益は緒方洪庵門人で、蘭方医をお手伝い医師に配置して種痘実施を円滑に行おうとしていた。このようにして佐賀支藩領へも引痘方医師が派遣され、村や町の医師が手伝い医師として種痘の技術を習得し、領内に広めていったとみられる。山代郷立岩村での種痘の実施例をみよう。嘉永八年四月の立岩山本家日記(88)に次のような記事がある、

(嘉永八年) 四月七日八重霞、里迄闇也。予、蔵仕事、今日当村御山方子供ノ分植痘瘡植付有、会所ハ久原糺屋也、医ハ佐嘉御テシ医并皿山幽テツ、作土井濤軒、イマリ幸善町何某ノ由也。

当村(立岩村)山方の子供分の種痘植え付けがまだだったらしく、植え付け場所は久原の糺屋で、医師は佐賀から御殿医(名前不明)、皿山の幽テツ(勇鉄)、作土井の濤軒、伊万里の幸善町の何某四人体制で種痘を実施した。

安政三年(一八五六) 四月の日記には次の記事がある。

四月十八日晴天極暖

今日引痘方植方有、会所久原糺屋ニ而、此度先日ノ植残、西分、西大久保邑、始テ植之分、久原、立岩邑惣テ久原百三拾人余、植方ニ成、脇村ハ都合植方立岩ハ不植ニ付、又々、其所三丁兵十其

外、庄屋達心配ニ付き、再願いたし、都合八十人余植方ニ相成申、尤滑榮筋へ點念(天然)痘流行ニ付、浦崎ノ分ニ而再願ニ成、惣テ其内ニ、予倅源三願加へ植方いたし

医師 佐嘉原田玄龍 作土井峯静軒、イマリ森永見有、同山口謙順

惣而願方帳面再写いたし、暮々舟便ニ而浦崎ヨリ帰り帳面表書ニ松浦郡山代郷立岩村引痘點名帳

前回植え残しの分が西分・西大久保、初めての分が久原・立岩村、総じて一三〇人分を久原糺屋で植えたが、脇村や立岩は都合により植えないというので、該当の村々の庄屋たちが心配して、種痘の再願をした。都合八十人ほど植え付けた。滑榮筋で天然痘が流行しているので、浦崎の分で再願の者に種痘をした。卯之吉の子源三もこのとき願いに加えて種痘をした。医師は佐嘉の原田玄龍、作土井の峯静軒、伊万里の森永見有、同山口謙順の四人だった。松浦郡山代郷立岩村引痘願點名帳も作成した。天然痘に対して種痘が有効であることが庄屋層に認識されており、彼らが種痘の実施を求めていることがわかる。また、引痘方でも、組織的に種を維持し、浦崎の分を天然痘流行の滑榮筋に回すなどの工夫もしていたこともわかる。種痘後、大体六日後に巡回して前回の結果を診断したり、新たに植えたりした。

(安政三年) 四月廿四日

次ニ今日引痘方植方有、又会所久原糺屋ナリ、先日十八日倅源三植方ニ相成候得共、数六ツ之内、壱ツ植ル、残不植ニ付、又々今日再植ニ成ル、脇方モ今日迄、大体植仕舞ニ成ル、予女房兩人ニ而連参リ、八ツ比帰着。

十八日に植えた卯之吉の子源三が付き方がよくなかったので、再植をした。脇村のほうも今日までで大体、植え終わった。

(安政三年) 四月廿七日

又、今夜、引痘神勧請イタス。山伏光明院也

種痘で善感するのは、引痘神が付くからだと考えられており、山伏に引痘を祈らせている。

(安政三年) 五月朔日

今日引痘方規日ナリ、会所久原糶屋ナリ、予倅源三ヲ女房連出候処、去月十八日植方ニ相成候内、壹ツ植居候ニ付、尤二番植次ハ再見ニ候得共、此節印鑑被仰付、七ツ比罷帰リ、印鑑左之通、

立岩村 卯之吉子  
印 安政三年 二才印  
辰五月朔日 源三郎

引痘方の規日は、植えて六日後に巡回、一二日後に検査し種痘済証の発行と決まっていたようである。会所は久原の糶屋だった。日記を記録している山本卯之吉の子源三郎も、先月一八日に植えた痘苗が無事に活着したので、右の様な種痘済証を貰った。その後、山本家では、五月四日に源三郎の種痘済祝いとして笹湯をして客を招待している。

安政六年九月一五日にも、楠久本光寺で巡回の種痘が行われた。

安政六年九月十五日

今日御私領方引痘植痘瘡有、楠久本光寺出席也、

医師 サカ 三田道筑  
西分 大庭良伯

当村ヨリ植方人々左之通

右五 年三才 左五

|         |           |
|---------|-----------|
| 同 三才    | 予 卯之吉娘 なか |
| 同 四才    | 長次郎娘 くま   |
| 同 三才    | 綱五郎子千太郎   |
| 同 四才    | 幾藏子 浅吉    |
| 同 四才    | 栄藏娘 しけ    |
| 同 二才    | 和助子 末吉    |
| 同 四才    | 卯三郎子儀三郎   |
| 同 十才    | 嘉吉子林三郎    |
| 同 八才    | 沖藏娘 やす    |
| 同 三才    | 同 きく      |
| 同 四才    | 源藏子玉五郎    |
| 同 二才    | 伊吉娘 たき    |
| 同 四才    | 安五郎娘さき    |
| 同 二才    | 市次郎子幾三    |
| 同 三才    | 又五郎子半助    |
| 同 三才    | 岩藏娘 とら    |
| 同 四才    | 新藏子兵たろう   |
| 同 四才    | 沖藏子長之助    |
| 同 二才    | 武助娘 やす    |
| 同 二才    | 常吉子亀太郎    |
| 男 女 二拾人 |           |

予、庄屋代ニ而夕方帰宿、尤久原酒屋へ立寄、当年病多ク余リ候

楠久 峯 雲台  
キス 檀 文逸

ニ付、右酒場へ売方ニ付、惣而壱挺ニ付手取金三步ニ<sup>ハ</sup>約定いたし置

この日、楠久本立寺で種痘をうけたのは、四歳が八人で最も多く、二歳から一〇歳までの計二十人の男女だった。右に五顆、左に五顆植える方法であつた。佐賀から三田道筑（華岡青洲門人の子カ）、西分から大庭良伯（大庭雪齋弟で雪齋門人）、楠久の峯雲台、喜須の檀文逸ら四人の医師が出張して実施した。佐賀の三田は藩の引痘方医師で、大庭良伯は西分に住居していた。

（安政六年）九月廿一日晴天

今日、引痘方中見ニ来る。瀬戸郡蘆酒屋出席也、当村男女共、去ル十五日植方之内、上揚長次郎娘くま壱人再植ニ相成申候（中略）、予娘なか左右五花宛植立之内、左右壱ツ宛植ハル。

引痘方の医師がやってきて経過をみた。十五日の種痘から七日後だった。くまが再種となり、卯之助娘は左右五ツ宛植えたうち、壱ツついた。そこで、山本家では「（安政六年）九月廿三日雨、今日引痘方神勸請イタス、法主光明院」と引痘神を勸請して、今後天然痘にかからないよう祈願した。

（安政六年）九月廿七日

今日、引痘方三度目、印鑑受取として伊万里喜須村庄屋宅へ参ル。然処、当村幾蔵子浅吉、又、沖蔵娘やす、同妹きく、此三人後年再種ニ相成申候、

予娘なか印鑑左之通。

安政六年 未九月十五日  
印 山代郷 立岩村  
三才 卯之吉娘 なか

引痘方が三度目にやってきたのは、種痘十二日目で、卯之吉娘ながが善感したという種痘済の印鑑（証明書）を発行した。そこで山本家では「（安政六年）十月十二日晴天、今夜娘なか、此度引痘神扱礼として光明院へ参る。尤御初穂銀三匁包并酒少々いたす。次ニ今夜浦崎へアヤツリ有之候由、養父子女房見物ニ参ル并下男下女参ル」と記録した。卯之吉娘なかの種痘が無事付いたので、引痘神がついたお礼として光明院へ参つて銀三匁を包んで差し出してお祝いの酒を少し飲んだとある。

このように、引痘方の巡回により、安政三年には久原で一三〇人、脇村と立岩村で五〇人、安政六年に立岩村二〇人などの子供に種痘を実施した。庄屋の方から種痘を願っている様子も読み取れる。種痘が実施され、実効が理解されていくと、西洋医学の有用性は庶民レベルにも伝わっていった。また、西洋医薬も村に浸透し始めた。

安政五年（一八五八）にコレラが大流行した。八月二五日から二七日にかけ、多久の医師らは、流行病の薬種として、アラビアゴム、麝香、カミルレ花、アヘン、ローダニウム、アルニカ花、キナワ<sup>（ツ）</sup>ト、ヒヨスエキスダリット、酒石散などの購入窺いを出した（89）。山本家日記にも「（安政五年）九月四日雨打降、日和少々吉、作事方今日庄屋方へ御役所より近来悪病流行ニ付、佐嘉小城近来数百人死ニ候由ニ而（後略）」とあり、八月初旬から流行病（コレラ）が流行し、佐賀・小城で数百人死んだという話が山本家に伝わった。

安政六年には、

（安政六年）七月十日立秋極照り



今日当月朔日の触書ニ而御郡方ヨリ近來吐きくだし病流行ニ付、前養生いたし候様申來り炎氣ノ折稠敷骨折間敷、焼酒呑間敷、飲食を過さず、夜食喰間敷、又、右病付候半者、早速身をあたため、湯ニ而手足をぬくめ、万一医師間ニ不合候半者、左之薬を用候様、

一、(キザミ) 精大麦 五匁

一、アラビヤゴム 壹匁

右水三合入二合ニせんじ、カミルレ花 五分右煎、計ニ入振出し粕を去り、一昼夜ニ相用い候様之事

とあり、藩のコレラ対策で、医師が間に合わない場合はアラビヤゴム、カミルレ花(健胃剤)の西洋生薬を煎じて用いる処方が出された。その実効はともかく、村人が調合できるほどの量の西洋生薬がすでに村の中に普及していたことが前提としてうかがえる。

以上から、弘化元年以降も佐賀藩領では、蘭方医を中心に郷医らをまきこんだ種痘の領内普及が積極的に実施されていたこと、医学寮による六四二人もの開業免札の授与と西洋医学への再教育が強制的に行われ、ほぼ慶応元年までには佐賀藩全領内医師の西洋医学研修が実施されただろうこと、蘭方医らの活躍により、庶民も種痘の実施を望むようになっていたこと、幕末には西洋生薬も村の日常生活に入り込んでいたことなどが判明し、むしろ西洋医学導入は積極的に展開していたことがいえる。

#### おわりに

佐賀藩の蘭学創始については、長崎警備の関連から長崎通詞との密接な関係が確かめられること、一八世紀後半にすでに佐賀藩領には神代家侍医で横尾元丈という紅毛流外科医がいたこと、寛政期には紅毛流外科医として長崎在住榎林栄哲高連や長崎蘭学の影響をうけた藩医

佐野孺仙を抱えていたこと、司馬江漢と佐賀藩士山領主馬の深い交流があったことなどを指摘し、佐賀蘭学の始祖を島本龍嘯としてきた通説は訂正できた。

なぜ、通説的理解が続いたのかについても検討しておきたい。一つの要因は、杉本勲氏論文の「蘭学は明和安永期に幕府のお膝元江戸で発祥し、たちまち京坂に波及した(91)」という蘭学発展理解にうかがうことができる。杉田玄白らの『解体新書』刊行以後、自覚的な西洋医学研究が興隆したことは周知の事実であり、従来は、江戸蘭学の興隆とその普及が蘭学の発達史でもあった。しかし、杉田玄白も長崎通詞吉雄耕牛に教えを請うており、玄白の学問の後継者である大槻玄沢も長崎遊学をして通詞に蘭語等を学んでいる。門人が百人をこえるほどの長崎通詞・蘭方医もいる事実は知られてはいたが、江戸蘭学の発展という視座からの長崎蘭学理解が主流であったからではないだろうか。

蘭学の発展という大きな枠組みの研究では、杉田玄白らによる江戸蘭学の興隆や地方普及と交流などの研究ももちろん重要であるが、オランダ通詞らの紅毛流医学や諸科学研究の流れと意義、すなわち長崎蘭学をわが国の蘭学発達における伝統的な大きな潮流として捉えなおし、その役割と位置づけを考察することが、わが国の蘭学発達史に正当な評価を与えることになるだろうと考えている。

本稿では、幕末期に、医学寮また好生館に依る蘭方医たちが佐賀藩領内医師六四二名もの再教育と西洋医学研修をすすめ、その成果があったこと、引痘方において、町医・郷医を組織して領内を巡回し種痘を実施していたこと、幕末には村に西洋生薬などが浸透していたことなども明らかにしえた。幕末期にこれほど領内に徹底して西洋医学

研修を強制した事例は我が国ではほかに例をみない。また、『医業免札姓名簿』とそれ以降にみるような医師開業研修制度は、明治期開業試験制度の一流流とみることもできる。このような事実から、幕末期佐賀藩蘭学が医学から軍事科学に転換したという通説についても、医学から軍事科学に転換したのではなく、ともどもあいまって拡大発展していったと修正すべきである。

長崎蘭学や長崎貿易の影響、地域の近代化との関連等々残された課題も多い。少なくとも医学史視点からは、『医業免札姓名簿』などの好生館文書や佐賀藩領内医学史資料の発掘調査と整理をすすめるとともに、佐賀藩全領内での種痘がどのように実施され、庶民がどううけとめたか、その地域的特性はなんであったのか、幕末期の西洋医学化の諸潮流が近代へどう展開したのかなどを、全領域で研究を進めていきたいと考えている。

付記：本稿をなすにあたり、地域学歴史文化研究センターの諸氏および佐賀県立図書館の多々良純・大園隆二郎氏に多大な教示をいただいた。感謝申し上げる。

なお、電子媒体による文字化けを防ぐため、江戸時代の合字は使用せず、ヨリ、シテなどと改めてある。

(1) 『国立歴史民俗博物館共同研究報告一一六集「地域蘭学の総合的研究」』（国立歴史民俗博物館、二〇〇四年）。

(2) トヨタ財団助成研究報告書研究代表者杉本勲『西南雄藩の洋学―佐賀・鹿児島・萩藩を中心に』（西南諸藩洋学史研究会、一九八五年）。

(3) 藤野保編『佐賀藩の総合研究―藩制の成立と構造―』（吉川弘文館、一九八一年）、同編『続佐賀藩の総合研究』（吉川弘文館、一九八七年）。

(4) 鍵山栄『佐賀の蘭学者たち』（佐賀新聞社、一九七六年）、佐賀県医師会『佐賀県の医学史』（佐賀県医師会、一九七一年）。

(5) 酒井シヅ『佐賀藩の医学』（『近代西洋文明との出会い―黎明期の西南雄藩』思文閣出版、一九八九年）、同『佐賀県立病院好生館所蔵書仮目録（幕末―明治期）』（『日本医史学雑誌』二三―二、一九七七年）。

(6) 生馬寛信「第五章 維新前後・佐賀藩の学校改革」（幕末維新学校研究会編『幕末維新期における「学校」の組織化』（多賀出版、一九九六年）の「(二) 洋学教育の組織化(一) 医学教育」に要点が整理されている。

(7) 長野暹『佐賀藩と反射炉』（新日本出版社、二〇〇〇年）。

(8) たとえば山口久範ほか「金武良哲製作木製顕微鏡の性能調査と復元模型について」（『近世日本における科学・技術の源流』『江戸のモノづくり』第3回国際シンポジウム実行委員会、二〇〇三年）・高橋則英「佐賀藩の湿板カメラの調査」（同前）、『大鑑・巨砲ヲ造ル』江戸時代の科学技術』（佐賀県立佐賀城本丸歴史館、二〇〇五年）、

松田清『佐賀鍋島家「洋書目録」所収原書復元目録成果報告書』（京都大学大学院人間・環境学研究科松田清研究室、二〇〇六年）、など。  
(9) 杉本勲編『近代西洋文明との出会い―黎明期の西南雄藩』思文閣出版、一九八九年）所収。

(10) 鳥井裕美子「『長崎方控』管見」（『蘭学の来た道―武雄領主の買ひもの帳』武雄市図書館・歴史資料館、二〇〇四年）。

(11) 中村質『近世長崎貿易史の研究』(吉川弘文館、一九八八年)。  
 (12) 佐賀蘭学の起こりについては、「町医者に島本良順なるものあり。長崎に蘭方の医書を学びて得る所あり、龍嘯と号し佐嘉に帰りにて開業し、蘭方によつて病を診療すると同時に、亦門人を集めて蘭書を講ぜしかば、文化以来及門の子弟やや多く、福地道林、大庭雪齋等の如きも之に就いて蘭学を修めたり。道林は漢医方及び本草学にも通じ、頗る博学の称ある上に、更に蘭学をも兼修したりしかば、一時刀圭家の中に名声高く秀で、公の幼年より其侍医となりて薬匙を執りたり。雪齋も亦漢学の素養あるに加へて蘭書に達し、且つ窮理学をも窺ひしかば、日新月歩の説を主張して漢学の固陋を罵倒し、その和蘭文典翻訳出版の挙は佐嘉の蘭学をなすものの経路を開きて、遂に蘭学寮の創設を見るに至らしめたり。彼が儒学者等を論破し去りたる理学の一端は、其手に訳述せられたる格知問答、其他数種に記されてあり。印刷して世に喧伝せらる。」(『鍋島直正公伝』第一編三〇八〜九頁)とある。

(13) 鍵山榮『佐賀の蘭学者たち』一七〜二〇頁。

(14) 「泰国院様御年譜地取五」(『佐賀県近世史料第一編第五卷』二四三頁)。

(15) 該当する今大路道三は、明和四年に今大路家を継いだ暘谷(一七五一〜一七九三)と推測される(『国書人名辞典第一卷』岩波書店、一九九三年、一八九頁)。

(16) 『佐賀県近世史料第一篇第五卷』二六三頁。

明和八年

一、四月、左之通医道致出精候付而、為御褒美今度御入部御祝付而御目見被仰付度、さて又医業為御勤メ向後年始ニも御目見被仰付度旨、

御匙中ヨリ依頼其通被仰付之

|        |      |
|--------|------|
| 直次郎殿家来 | 廣木順慶 |
| 対馬殿家来  | 執行元由 |
| 兵庫家来   | 山本寛安 |
| 阿波家来   | 川崎田龍 |
| 町医     | 沢野良伯 |

(17) 「泰国院様御年譜地取」『佐賀県近世史料第一編第五卷』二七七〜八頁。

(18) 「明和八年 御進物方 一、同廿三日、於長崎阿蘭陀懸絵板式枚・唐大理石盆一、後藤惣左衛門ヨリ高嶋八郎兵衛心遣ニ而差上候、右謝礼紅毛人江堺酒両樽、唐人江は松鉢植相望候由ニ付、右ニ多葉粉入相副候、以上」(『佐賀県近世史料』第一編第五卷、一八四頁)。

(19) 「泰国院様御年譜地取」『佐賀県近世史料第一編第五卷』二八七頁。

(20) 「泰国院様御年譜地取」『佐賀県近世史料第一編第五卷』二九〇〜一頁。

(21) 「治茂公御年譜」『佐賀県近世史料第一編第五卷』五四六〜七頁。

(22) 「泰国院様御年譜地取七」『佐賀県近世史料第一編第六卷』六〜九頁。

(23) 「泰国院様御年譜地取七」『佐賀県近世史料第一編第六卷』八一〜四頁。

(24) 「泰国院様御年譜地取七」『佐賀県近世史料第一編第六卷』九三頁。

(25) 『佐賀県近世史料第一編第七卷』一三七〜八頁。近世史料校註に

は Isaac Titzing とあつたが、Isaac Tisingh と訂正した。

(26) 『佐賀県近世史料第一編第七卷』一五九～一六〇頁。

(27) 『佐賀県近世史料第一編第七卷』一六七～一八頁。

(28) 「泰国民院様御年譜地取十」『佐賀県近世史料第一編第六卷』二八五頁。「安永六年」四月廿一日、長崎御番所之儀、数拾人相詰罷在候处、医師無之、急病有之砌及難儀候ニ付、只今迄御屋敷御出入医師上村春庵療治仕来候由ニ付而、此節春庵五人御扶持被為拝領、猶又差部出情仕候様被 仰付之」

(29) 「泰国民院様御年譜地取二十六」『佐賀県近世史料第一編第九卷』六頁。

(30) 深瀬泰旦『わが国はじめての牛痘種痘 楢林宗建』(出門堂、二〇〇六年)二九頁。また「阿蘭陀通詞由緒書」・「長崎阿蘭陀通詞由緒書」(板沢武雄『日蘭文化交渉史の研究』吉川弘文館、一九五九年所収)。

(31) 「泰国民院様御年譜地取天明八年」『佐賀県近世史料第一第八卷』一七二頁。

(32) 『楢林氏之伝』(佐賀県立図書館複製本)の原書は「鍋島家文書」〇三四―一三(鍋島報効会蔵)。渡辺庫輔『崎陽論攻』(親和銀行済美会、一九六四年)七三頁。

(33) 『「大鑑・巨砲ヲ造ル」江戸時代の科学技術』(佐賀県立佐賀城本丸歴史館、二〇〇五年)二二頁。

(34) 「泰国民院様御年譜地取天明八年」『佐賀県近世史料第一編第八卷』二二三頁。

(35) 渡辺氏前掲注32書によれば、栄哲が天明四年(一七八四)に一人扶持を得たという関場不二彦氏(『西医東漸史話』下巻)の説は

誤りであろうとし、「楢林氏之伝」によった古賀十二郎氏は「更に寛政三辛亥年(一七九一年、別本に寛政元年とある)に至り、鍋島家の懇請により」(『西洋医術伝来史』)云々としたらしいとある。

(36) 『佐賀市史 第二巻』(同編さん委員会、一九七七年)四七八頁。  
(37) 寛政三年三月に、長崎御番所出入り上村春庵に代わり、長崎医師柳隆元が五人扶持で召し抱えられている記事がある。「寛政三年 請役所他邦御用聞御目見御出入等 一、三月十日、長崎医師柳隆元儀、上村春庵代御番所御出入被 仰付、御当番年は混<sup>⑤</sup>と之様御番所罷越、其節は市中病用相欠候儀も有之殊ニ平日御屋敷中病人江も相懸、心懸宜、別而致太儀候ニ付而、左ニ書載之通被 仰付之

五人御扶持

長崎医師

柳 隆 元

但、京・江戸・大坂・長崎其外御出入、扱又銀主等江御扶持方并御加増等被仰付候義、都而略之」(「泰国民院様御年譜地取二十三」『佐賀県近世史料第一編第八卷』四二二頁)。

(38) 「泰国民院様御年譜地取二十七」『佐賀県近世史料第一編第九卷』一七九頁に「(寛政八年十二月)同廿一日、長崎御出入医師楢村<sup>(林)</sup>栄建、年来持伝候由ニ而、家隆卿筆御掛物一幅、御内々差上候付、銀五枚被下之」とあり、栄建は寛政一二年生まれなので栄哲高茂か栄哲高連の誤りかとの疑義があるが、寛政八年には楢林家が佐賀藩の出入医師として抱えられていたことは言えよう。寛政八年には「十二月廿五日、鍋島十左衛門家来江川玄格、眼科巧者ニ而、他方其外手広療治方ニ付、三人扶持被為拝領之」(同前、一七九頁)とあり、江川玄格を三人扶持で藩医として召し抱えている。他方とあるので江川も蘭方に通じていた可能性がある。

- (39) 「泰国院様御年譜地取三十二」『佐賀県近世史料第一編第九卷』四九一～二頁。
- (40) 前掲注31書及び渡辺庫輔前掲注32書七七頁。
- (41) 「泰国院様御年譜地取三十五」『佐賀県近世史料第一編第十卷』一〇六～七頁。
- (42) 「榊林氏之伝」に「文化七年午二月、斉直公御代御切米拾石御加増被仰付候」(渡辺庫輔氏前掲注32書七七頁)とあり、深瀬泰旦氏は文化三年(一八〇六)とし(深瀬前掲注30書三九頁)、後考の余地がある。
- (43) 「泰国院様御年譜地取」『佐賀県近世史料第一編第七卷』一九七～二〇三頁。
- (44) 副島廣之「勤王の先駆者 横尾紫洋」(善本社、二〇〇一年)。
- (45) 副島氏の研究では安永五年からとあるが、『佐賀県近世史料第一編第七卷』一九七頁史料では安永六年からとあるのでそれに依った。
- (46) 現在は財団法人武田振興財団杏雨書屋所蔵。副島廣之氏前掲書所収影印版四四三頁による。
- (47) 副島廣之氏前掲注44書三〇～二頁。『紅毛秘法』の薬方についてはより精査の必要はあろう。
- (48) 中野好夫『司馬江漢考』(新潮社、一九八六年)。司馬江漢については『司馬江漢全集』全四卷(八坂書房、一九九三年)がある。
- (49) 大園隆二郎「山領主馬とその時代(一)、(二)、(三)、(四)、(五)、(六)、(七)、(最終回)」(『新郷土』一九七八年四、五、七、九、一〇、一一、一二月号)。
- (50) 大園隆二郎前掲注49(一)論文。
- (51) 田中道雄「翻刻・山領梅山『大和路日記』」(『佐賀大國文』第二十一号、一九九二年)。
- (52) 「泰国院様御年譜地取二」『佐賀県近世史料第一編第五卷』一一八頁。
- (53) 「泰国院様御年譜地取四」『佐賀県近世史料第一編第五卷』二一六頁。
- (54) 中野好夫前掲注48書二五頁。
- (55) 堤主礼「雨中の伽」(『随筆百花苑』第一五卷、中央公論社、一九八一年)四二四頁所収。
- (56) 大園隆二郎前掲注49論文。
- (57) 「一金三両宛副嶋半十郎、村嶋雪川 右者司馬江漢江蘭画稽古被仰付候処、謝礼金其外不少物入有之、甚難渋之趣二付、願之末、御合力」(大園隆二郎前掲注49論文所収「斉直公御代 御側銀書拔」記事)。また、寛政九年四月二四日には、谷文晁とともに村山藤九郎が吉田三郎兵衛方で蕎麦をご馳走になっている。「一、今日吉田三郎兵衛方に蕎麦振舞候に付、村山藤九郎、篠崎朴庵、井戸甚助、岡田清助、谷文五郎など寄合申候。八ツ時頃より私宅まで御出可被下候。庭続に参り候故、私宅へ御出被成候はば、御一緒に参り可申候。此段、私宜申上呉候様、三郎兵衛申聞候」(「柴栗山手簡」森銑三著作集第三卷人物編三、中央公論社、一九七一年)一九六頁。この村山藤九郎が司馬江漢に蘭学を学んだ佐賀藩士であれば、寛政期に谷文晁らとの交流をしていたことになる。
- (58) 大園隆二郎前掲注49論文(六)。
- (59) 三輪英夫「百武兼行」(『郷土史に輝く人々 第八集』佐賀県青少年県民会議、一九七六年)。
- (60) 杉本勲編前掲注9書七～八頁。

(61)「七月十六日、医学寮被相建、取立之儀両御丸御医師之内ヨリ兼帯、扨又学館教職ヨリ懸り合、御遣料為御試米拾石被差出度旨、請役所ヨリ伺之通被仰付」(「直正公譜一」『佐賀県近世史料 第一編 第一一巻』、佐賀県立図書館、二〇〇三年) 三二頁。

(62)『鍋島直正公伝』第二編、一四四頁。

(63) このとき書き上げられた多久領内医師(含む佐賀城下在住)は、木下補柏(六八歳、山口村)、木下高庵(二七歳、補伯世倅)、中山宗純(五四歳、志久村)、山口玄洞(五〇歳、多久町)、山口玄逸(二〇歳、玄洞子)、松崎雲皓(三二歳、上多久村)、岡橋文賢(三四歳、志久村)、西元立(六七歳、多久原村)、於保辰三郎(一一歳、多久原村)、山口玄智(五八歳、小田)、山口友碩(二六歳、玄智子)、尾形道次郎(一五歳、高尾)、前山三立(四四歳、材木町)、松尾宗純(四二歳、別府村)、鈴山俊庵(二七歳、納所村)、鶴田宗哲(五三歳、上多久)、池田宗哲(上多久村)、池田三省(四六歳、宗哲子)、尾形良吉郎(一一歳、池田宗哲家に同居)、三根意圓(三八歳、池田宗哲家に同居、外科医)、於保高洞(七二歳、水ヶ江町)、於保玄庵(四五歳、白山町)、吉田宗賢(三四歳、上佐嘉北里村)、梶原林仙(二五歳、水ヶ江町)、岩本仲健(五四歳、水ヶ江針治)の二五人であつた(『多久市史第二巻近世編』多久市、二〇〇二年) 五二八〜九頁。

(64)「(天保一四年)一、十二月、伊東二兵衛弟玄朴、蘭学医術拔群熟達二付、御用有之被召出旨被仰出 但、玄朴多年江戸住居罷在、此節御扶持拝領、御側御医師被仰付」(「直正公譜 三」『佐賀県近世史料第一編 第一一巻』)、一二二頁。また「同十四日、左之通被仰出候二付、以書取御留主方へ被相達 伊東二兵衛弟 伊東玄朴 蘭学医

術拔群熟達二付、御用被為在候、依之一代被召出、七人扶持拝領被仰付旨」(「直正公御年譜地取 四」『佐賀県近世史料第一編 第一一巻』、六一九頁)。

(65)「(弘化元年七月一二日)同日、鍋島山城殿家来大石良英被召出旨仰出、其後御側御医師其外被仰出」(「直正公譜 三」『佐賀県近世史料第一編 第一一巻』)、一二九頁。「(弘化元年七月一二日)同日、左之通被仰出 被召出、一代侍、五人扶持 山城殿家来大石良英」(「直正公御年譜地取 四」『佐賀県近世史料第一編 第一一巻』)、六二七頁)。

(66)鍵山栄前掲注4書、九頁。

(67)「直正公譜 三」『佐賀県近世史料第一編 第一一巻』一八五〜六頁。また同書七一七頁にもほぼ同文が記載されている。

(68)『多久日記』嘉永二年八月十二日の項に「引痘方水町昌庵、馬渡耕雲、牧春堂、大石良英、右懸合永松玄洋、山口良哲、安房守家来外尾文庵」とある(『多久市史第二巻近世編』五三四頁)。

(69)『佐賀市史第二巻』(同編さん委員会、一九七七年)四八〇頁。

(70)『多久市史第二巻近世編』五三五〜六頁。

(71)「(嘉永四年二月一七日)同日、御仕組所ヨリ 医師之義二付、前々ヨリ委細被仰出候次第も有之、人命を預り大切之業柄二付、何卒格別之良医出来候通被御取計度義二候、惣而術方巧拙ニ依り家督等之吟味相成候と之義は、御印帳御書載之旨も有之候二付、医師之義、向後家業未熟之間は組迦被召置、段々熟達之上、組付等被仰付候様半は、若手之面々致奮発、一際差部術方熟達可相成、其内ニは格別之良医も出来、急度御趣意相貫候通可相成二付、大図左之通ニも可被御取計哉」(「直正公御年譜地取七」『佐賀県近世史料第一編 第十一巻』七四一

（二頁）。

（72）『佐賀城本丸歴史館寄託県立病院好生館文書』『医業免札姓名簿』の分析は酒井シヅ氏前掲注5論文に負うている。総数は六五〇名余とみられるが、今後精査したい。

（73）「蘭学之儀、大石良英頭取被仰付置候得共、地行勤方ニ而打采教導方届合兼候ニ付、左之者良英同様頭取被仰付度、学館ヨリ相達候。右者其通被仰付方、可有御座哉奉伺候 大庭雪斎」（「直正公御年譜地取七」『佐賀県近世史料第一編第十一卷』七七二頁）。

（74）「直正公譜六」『佐賀県近世史料第一編第十一卷』、二四〇頁。

（75）「直正公譜六」『佐賀県近世史料第一編第十一卷』、二五九〜六〇頁。なお、「好生館」の額は医学寮が建てられた時に下し置かれたもので、今度、「好生館」が正式名称となったとあるので、安政五年以前にも好生館と呼ばれていたとみられる。事実、儒医で漢詩人古賀朝陽『朝陽詩集鈔』（佐賀県立図書館所蔵、天保八年刻）に「冬至好生館清集分得冬韻医学齋成属仲冬適佳朝拜神農春光（下略）」とあり、そのことを裏付ける（大園隆二郎氏の御教示による）。

（76）「直正公譜七」『佐賀県近世史料第一編第十一卷』、二五九頁。

（77）『自安政七年申三月中至万延元年申五月中御屋形日記 米倉簡之助役内』（多久市歴史資料館蔵）安政七年三月一三日条。

（78）『安政七年申閏三月中御屋形日記 米倉簡之助役内』（多久市歴史資料館蔵）安政七年閏三月二日条。田久保佳寛「古文書を読んで思うこと」（秀村選三編『西南地域史研究』第十二輯、文献出版）四五七〜四五八頁。

（79）『万延元年申四月中御屋形日記 米倉簡之助役内』（多久市歴史資料館蔵）万延元年四月一六日条。

（80）『万延元年六・七・八月中御屋形日記 米倉簡之助役内』（多久市歴史資料館蔵）万延元年七月条。

（81）「登籍人名小記」（鈴木要吾『蘭学全盛時代と蘭疇の生涯』伝記叢書一三七、大空社、一九九四年所収）。

（82）「医師一統西洋法相学び候様仰せ付けられ候につき、最前相渡し置かれ候開業免札、旧年御取り立てに相成り候について追々改めて相渡され候わで叶わざる処、今に学業一新いたしかね、一般相渡さるべき様これなきにつき、余儀なく学業相改め候向々、当節相渡さる義に候、ついでには御改築以来、毎々相渡され候次第もこれある処、今以て絶えて出席これなき向もこれあり、殊に一往開業差し免され候向は打ち追いの姿（今までの状態）にても苦しからざる哉に心得違いの向きもこれある哉相聞え宜しからざる義に候条、即今より一際出精、向（来る）亥年（文久三年・一八六三）まで学術共吃度右年限中相改めざる向は配剤をも差し留め相成る義に候条、其心得これあるべき事

西七月二日

好生館付役中」（『佐賀市史

第二巻』同編さん委員会、一九七七年）四八三〜四頁。

（83）『佐賀市史第三巻』（同編さん委員会、一九七七）四八四頁。「一件 西洋法の儀、治療は申すに及ばず 製薬等を初め諸事精密にこれあり候処より形の如く仰せ付け置かれ候処、宿習に泥み御趣意一貫いたしかね候通りにては決して相すまざる儀候条、漢法の向々一切取り止め西洋医に相改め候様仰せ付けられ候に付き、最も差しつけより（直ちに）取り止め候通りにては難渋の向もこれあるべく候条、御城下最寄り遠在にしたがい、左に書載の通り年限相立てられ候間、それまでの内、研究を遂げ吃度相改め候様、惣じて開業免札は西洋法熟達の方のみ、かつがつに（そのたびごとに）相渡され、自然右年限中相改

めざる向は余儀なく七留（治療禁止）仰せつけらる義候条、此段筋々懇に相達さるべく候 已上」。

（84）酒井シヅ氏前掲注5論文では、諫早の菅原柳溪が独学でオランダ医学修学後、熊本の外科学医鳩野塾に入門後、明治四年に開業している事例を紹介している。

（85）添川正夫『日本痘苗史序説』（近代出版、一九八七年）、拙稿『在村蘭学の研究』（思文閣出版、一九九八年）、深瀬泰旦『天然痘根絶史』（思文閣出版、二〇〇二年）など。

（86）「直正公譜六」『佐賀県近世史料第一編第一卷』二〇八頁。

（87）『安政七年申閏三月中御屋形日記 米倉簡之助役内』（多久市歴史資料館蔵）安政七年三月一日条。

（88）伊万里市山代町山本進氏所蔵文書。同家文書は、平成一八年から地域学歴史文化研究センター地域史・史料学部門を中心にワークシヨップで目録づくりを実施中である。

（89）『多久市史』（多久市、二〇〇二年）五二四～五頁。

（90）杉本勲編前掲注9書一八頁。